

# 川野先生へ感謝をこめて

後 中 陽 子

佛教大学文学部英文学科に入学した通信の学部生のころから現在の博士課程にいたるまで、川野先生には長年に亘りあたたかな指導を賜りました。

お会いした当初のころ、学部で3年生であった私は、卒業論文を書くか、それともそれに代わる単位を取るか迷っていました。そんな折、卒論のための学習会に参加しました。迷っている旨をお話すると、指導して下さいった川野先生はニコリ笑って、「書かれるほうがご自分のためになると思いますよ」…と。そのお言葉と微笑みに背を押され、卒論を書こう！と心を決めました。先生がおっしゃったとおり、論文を書いたことは自分にとって大切な糧となったと、いまにしています。川野先生のにこやかな笑顔に励まされた学生は、私の他にもたくさんいることでしょう。通信生時代から指導教授となっていたいただいた川野先生には多くの場面でお世話になりましたが、先生のお応えはつねに迅速かつ丁寧で、どれほど力づけられたかわかりません。川野先生になら自分の研究目的や意志をくみとってもらえる…そんな信頼感・安心感がもてたからこそ、通信制で学ぶという距離や孤独をまったく感じませんでした。

川野先生のおかげで得られた貴重な学びの体験は数知れません。たとえば、松本真治先生とともに、P. Preston氏やM. Thormählen 女史の特別講演を佛教大学で開いて下さったこと。ここ本学で外国の参考文献の著者を目の前に、直接に質問し、言葉を交わせた感動と幸せは格別な思い出となっています。そして、2000年と2002年にはイギリスのノッティンガム研修の実施に向けてご尽力なさっていたのが印象に残っています。

また、アイリス・マードックについて語られた川野先生の最終講義は、最後に映画‘Iris’のテーマ音楽がかかるという斬新なものでした。先生のご講義は

いつもこうした遊び心をも忘れていないように思います。映画や朗読テープ、音楽などを鑑賞することによって、文学作品や作者の人間像をいっそう近しく感じることができるのです。

先生の授業を受講したときのこと。2004年から私は、本学の文学研究科博士課程に進学し、通学で学ぶようになりました。川野先生のディラン・トマスと T.S. エリオットのご講義を受講し、難解な詩をみなで共有する楽しさを知りました。学生ひとりひとりの自由な発想を大事にして下さり、さまざまな解釈の可能性を広げる先生の授業は、文学をさらに奥深い有意義なものと感じさせてくれました。

このような川野先生の研究・教育に対する情熱の素晴らしさは周知のことと思いますが、さらに、他者への心配りを忘れない細やかなお人柄に憧れ、尊敬いたします。寸時を惜しんでの努力、あらゆる物事に対する誠実さと真摯な心掛け、川野先生のお姿を人生の手本としたいです。多くのことに意欲的にとりくみ、そして実現してゆかれる底知れないバイタリティが、ご容姿の若々しさに表れているのだとも思います。

卒業論文、修士論文、そして博士課程での研究指導においても、ご教授を頂戴しましたこと、感謝の念にたえません。川野先生にお会いできて本当に嬉しく思います。厚くお礼申し上げますとともに、ますますのご健勝とご活躍をお祈りいたしております。